







(1) 《これからの創造のためのプラットフォーム》ウェブサイトの継続

<https://www.sozoplatform.org>

2014年度に開始したプロジェクト《これからの創造のためのプラットフォーム》では、アート、デザイン、思想、暮らし等の様々な領域の実践者の知見に触れながら現代社会の課題を考察し、思考の可動域を広げ、これからの時代の「創造」のあり方を探ってきた。2022年度も引き続きアーカイブがウェブ上で発信されている。(以下のイメージはウェブトップ画面)

**これからの
創造のための
プラットフォーム**

		
からだの錯覚 小鷹研理	狩猟採集民と動物とアート 山口未花子	Talk with Vincent Moon ヴィンセント・ムーン
		
人・音・織・機 末松グニエ文 伊藤 悟	フィールドの音を録る 柳沢英輔	映像人類学講義I, II 川瀬 慈

(2) 《OKINAWA NOISE MAP》ウェブサイトの継続

<https://www.okinawa.noisemap.jp>

2012年から沖縄の米軍基地周辺の騒音を立体音響として録音し、日本の沖縄県以外の場所で再生する活動を継続してきた。2016年にこれまで収集された基地騒音を地図上にマッピングし、ウェブ上で公開するプロジェクト《Okinawa Noise Map》を開始し、現在も継続している。(協力：松野峻也、具志堅裕介)

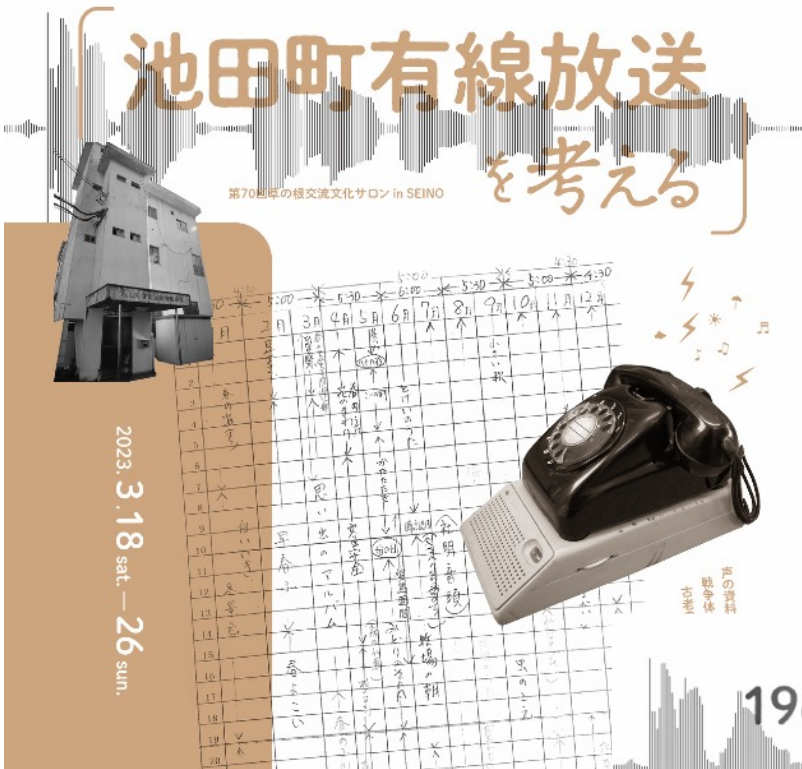


OKINAWA NOISE MAP の画面



Googleストリートビュー重ねられた騒音の再生画面

(3) 「池田町有線放送を考える」ミーティングに参加



2022年中に行われたプロジェクトのミーティングに参加し、2023年3月に行われる展示において、ラジオ番組のアーカイブに残された人々の声をもとに、サウンド・インスタレーションを制作する。

「場所・感覚・メディア」プロジェクトに参加する有志学生とともに展示のあり方・方向性を検討する。

第70回草の横交流文化サロン in SEINO
「池田町有線放送を考える」
 2023年3月18日(土) - 26日(日)
 会場：土川商店「場所かさじゅう」岐阜県岐阜郡池田町宮地 930

およそ半世紀の間、池田町民の日々の暮らしを伝え、町民の心を繋いできた池田町有線放送が幕を下ろしたのは、2017年のことです。残された膨大な番組音声データは、行き場を失っていました。それを何とか保存、活用できないかという有線放送の旧職員の声を情報科学芸術大学院大学が拾い上げました。そして今、デジタル化と整理が進み一つの形になろうとしています。今回はその一部を紹介します。

- ・展示：池田町有線放送の歴史、取材資料、その他
- ・番組の試聴

トークと交流会：3月19日(日)

- ・トーク (14:00 - 15:30) 参加費：無料 (定員 20 名)
高橋厚子・竹中繁司 (元有線放送職員)
- ・交流会 (16:00 - 18:00) 参加費：1000 円 (定員 20 名・軽食付き)

問合せ (トーク・交流会参加申し込み先)
 草の横交流文化サロン in SEINO 実行委員会事務局 (土川商店内)
 岐阜県池田町宮地 930 (Tel 0585-45-2120)

主催：草の横交流文化サロン in SEINO 実行委員会
 共催：池田町有線放送アーカイブ活用推進委員会
 後援：池田町教育委員会 文化プロジェクト SEINO
 協力：情報科学芸術大学院大学 [AMAS]
 金山研究室 | 「場所・感覚・メディア」プロジェクト

池田町有線放送とは
 池田町有線放送電話農業協同組合 (岐阜県岐阜郡池田町) が 1964 年に設立した固定電話兼放送設備です。朝 6 時から夜 9 時半まで多いときには 10 数回、町の情報、文化、娯楽など様々な自主番組が制作され、家庭や職場で聴かれました。2017 年まで開局以来 52 年間 365 日休みなく放送されました。

(4) 沖縄やんばる地方でのフィールドレコーディングと編集・アーカイブ作業の継続

2019年以降、沖縄北部ヤンバル地方で自然環境の録音（フィールドレコーディング）を継続している。2021年には、この録音をもとに歌手の松田美緒、人類学者・詩人の川瀬慈とのライブイベントで共演した。そして2022年以降もフィールドレコーディングと編集・アーカイブ作業を継続している。

(5) 岐阜新聞 悠遊ぎふ12月号「私の本の話」への寄稿

2022年12月11日発行予定の岐阜新聞別刷り悠遊ぎふ12月号「私の本の話」のコーナーに愛読書を紹介した。

05

悠遊ぎふ

私の本の話

「ピッカフェ」オーナー
堀江俊宏さんからの紹介
情報科学芸術大学院大学（IAMAS）教授

前林 明次さん

「自然なきエコロジー」 ティモシー・モートン著、篠原雅武訳

「とりまくもの」
自然の概念提起

「自然なきエコロジー」というこの本のタイトルに感じる違和感はどこから来るのだろうか。「エコロジー」という語が生態学や人間と自然との調和について考えることを指すのに、そこに「自然がない」とはどういうことなのか？
誰かによく考えてみれば、エベレストでは登山者のゴミが増加し、海洋はマイクロプラスチックで汚染されている。人間社会と自然環境は調和しているとは

「自然なきエコロジー」としての自然へ

まえびやし・あきつぐ
1965年神岡市生まれ。サウンドアーティスト。情報科学芸術大学院大学教員。さまざまなサウンドメディアを駆使し、場所の体感を再構成する音響作品を制作している。2017年には岐阜県美術館において『場所をつくる旅』（IAMAS Artist Files 5）を開催した。現在、沖縄北部ヤンバルでのフィールド・レコーディングを継続中。

言い難いし、そこには美しく、植れの対象としての「自然」はもはや無い、というが現実だ。
著者のティモシー・モートンは、まずその現実を直視しよう、と「言う。そしていまだに私たちは「自然」を人間社会から切り離し、ロマン主義的に憧れ、消費し続けているのではないかと、鋭く批判する。
それを乗り越えるために「とりまくもの（being-with）」という概念が提起される。私たちがとりまく環境や雰囲気（アテンション）を感知し、注意を向けるためにさまざまな芸術表現、なかでも詩や音響芸術、サウンドアートをヒントに、あらたな自然・生態系についての概念を制作しよう、というのが本書である。